

小学校におけるいじめ(1)

酒 井 亮 爾*

「いじめ」は、どの社会でもどの世代にも昔からみられたが、2006年には小・中学校でいじめを苦にした自殺が相次いで起こり、再度、いじめが社会問題としてセンセーショナルに取り上げられた(酒井, 2007)。ここでは、小学校の高学年(4年生～6年生)を対象にいじめに関する質問紙調査を実施した。質問紙の項目は、児童の衝動性、いじめに関する諸経験(被害経験や加害経験)、いじめの様態、いじめに対する対処の仕方、いじめられたときの気持ち、いじめについての考え、などから構成されており、それらを評定尺度で求めた。調査対象は愛知県内の3つの小学校の4, 5, 6年生児童303名(男子153名, 女子150名)であった。その結果、小学生の衝動性や直接的な暴力的影響も中程度であり、暴力的な経験の影響は、男子のほうが女子よりも学年が高くなると比率が高くなっていったが、暴力的経験の受けやすさには個人差がみられた。

どの学年でも約8割の児童は、いじめられた経験があること、いじめ被害の様態は、「悪口」、「いやなことをいわれた」、「仲間はずれ」など精神的な苦痛をとまなういじめが多く、次いで「たたく」や「暴力をふるう」、さらに「ことばでの脅し」など直接的な行動となっていた。

いじめられたときの対処法として、被害者が親や先生にいじめられていることを訴えたり、また直接に加害者に対して「いじめを止めるように」と意思表示をしている比率が高く、被害者が黙ってがまんしたり、やられっぱなし、ということは少なかった。こうした点では、親や教師がいじめの初期の段階で適切な対処をすることがいじめ防止の鍵になるであろう。

キーワード：いじめ、いじめ自殺、児童、小学校

1. 問題

学校におけるいじめが問題視されるようになったのは、青少年の非行の第3のピーク時の直後からである。1985年には、いじめが155,066件(小学校96,457件, 中学校52,891件, 高等学校5,718件)報告されている。1986年には、東京都中野区で中学2年生の男子生徒がクラスの複数の生徒によるいじめで自殺に追い込まれている。この事件は、「葬式ごっこ事件」といわれ、担任がいじめに加担していた事実などによって社会的に注目された事件である。

この事件を契機として、学校現場ではいじめを押しえ込むための種々の対策がなされてきた。それによって、1993年のいじめ件数は21,598件(小学校6,390件, 中学校12,817件, 高等学校2,391件)と減少していた。

しかしながら、1994年には、愛知県西尾市の中学2年生(中日新聞社・社会部編, 1994)が十数名の同級生たちから100万円以上の金銭を恐喝され、それに耐え切れずに自殺している。この事件が引き金になったかのように、1995年には、いじめ件数が59,867件(小学校26,614件, 中学校29,069件, 高等学校4,184件)と増加し、またメモやフロッピーなどに遺書を残して自殺していったいじめ事件も起きている(酒井, 1996, 2000)。

こうした事態に対して、文部科学省の主導でいじめ対策緊急会議(1994)の緊急アピールに基づき、学校におけるいじめの総点検や学校と地域社会や関係行政機関との連携、さらにはいじめ問題対策センターの設置、家庭教育電話相談、子ども・家庭110番など、次々と防止対策がされてきた。2005年には、いじめ件数が

*愛知学院大学心身科学部心理学科
(連絡先) 〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 E-mail: uga-rski@dpc.agu.ac.jp

20,072件（小学校5,087件，中学校12,794件，高等学校2,191件）へと漸減していった。

しかし、2006年には小・中学校で相次いでいじめによる自殺が起きている。いじめがマスコミでセンセーショナルに取り扱われ、社会問題化したのはこれで3回目となる。1985年と1994年にいじめが社会問題化したときも種々の対策が提案されて実行され、ある程度の効果をあげてはきたけれども、依然としていじめがあり、苦しんでいる児童生徒が多くいたのである。

従来、いじめの定義については、いじめを「自分より弱いものに対して、一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているものであって、学校としてその事実を（関係児童生徒、いじめの内容、等）を確認しているもの」（文科省初等中等教育局中学校課、1993）としていた。しかし、子どもをとりまく大人社会が急速にグローバル化し、先行き不安定であり、大人が子どもたちに明るい未来を示すことができにくい社会となっている。子どもの環境も以前よりも変化しており、その変化も速くなっている。子どもの数の減少、子どもが自由に遊ぶことのできないような地域社会、ゲーム機や携帯電話の普及、パソコンなど、子どもたちの環境は多様な様相を呈している。子どもたちのいじめについても、文科省は、いじめの新しい定義（2007）を示している。それは、「子どもが一定の人間関係のあるものから、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもので、いじめであるか否かの判断は、いじめられた子どもの立場に立って行う。また、従来のいじめの種類に、パソコン・携帯電話での中傷、悪口を追加する。」というものである。この定義を基にして、各学校から報告された結果によれば、2007年度の小・中・高・特殊教育諸学校のいじめ認定件数は、124,898件ということであった。

II. 目的

従来、いじめが多く報告されているのは、高等学校よりも小・中学校である。また、小・中学校を比べてみると、1985年と1986年の報告では、いじめ件数は小学校のほうが多い。しかし、それ以後の調査結果では、一貫して小学校よりも中学校で多いことが報告されている。たとえば、2005年の公立学校のいじめ発生校数を比較すると、発生件数は小学校が5,087件、中学校が12,794件、発生率が小学校11.3%、中学校34.6%、1校当たりの発生件数は小学校が0.2、中学

校が1.2となっている。

中学生の時期は、心身ともに急激な変化を経験し、自己の心身をコントロールしにくいために、対人関係でトラブルを起こしやすい時期である。いじめやいじめを苦しめた自殺なども、中学生のころに顕在化しており、これまでも問題にされてきた（酒井、1995）。しかし、発達の加速度現象などにもみられるように、小学校の高学年では第二次性徴を経験する児童も多く、青年期特有の自我の芽生えなどもみられるようになる。そうしたことを考慮して、この研究では、小学生（4、5、6年生）を対象として、いじめに関する過去の経験度やいじめと深い関連性があると考えられる児童の衝動性、いじめられた経験、いじめの様態、いじめられたときの対処法などについて、質問紙を用いて検討していく。

III. 方法 質問紙法

調査日時：平成18年7月11日～18日

調査対象：愛知県内の3つの小学校の4、5、6年生児童。4年生99名（男子47名、女子52名）、5年生99名（男子49名、女子50名）、6年生105名（男子57名、女子48名）合計303名（男子153名、女子150名）

質問紙の構成：表紙には、調査依頼文とフェイス・シート（調査実施日、学校と学年、性別）。

質問1では、いじめと関連のある衝動性に関する7項目（気が短い、深く考えずに行動してしまうことがある、など）を3段階評定。

質問2は、直接的・間接的な暴力的被害と自分の暴力的経験や行動（大人の人にたたかれたことがある、友だちにたたかれたことがある、友だちにいやなことを言ったことがある、など）を3段階評定（1. 一度もなかった、2. ちょっとあった、3. 何回もあった）で、また、暴力をあつかった映画やテレビ、ゲームソフト、漫画や雑誌を見ている程度を3段階評定（1. ない、2. 少しある、3. よくある）で質問した。

質問3は、いじめられた経験の有無といじめの様態（仲間はずれ、悪口を言われた、持ち物をかくされた、嫌なことを言われた、など）、いじめを受けたときの対応（がまんした、友だちに助けを求めた、先生に言った、など）、さらにいじめられたときの気持ち（がまんするより仕方がないと思った、だれも助けてくれないのでとてもつらかった、いつか返しをしたいと思った、もう学校へ行きたくないと思った、など）に

ついて、あてはまる項目すべてに○印をつけてもらった。

なお、質問紙には、質問4から質問8まであり、いじめの加害経験や傍観者であった経験の有無、いじめ内容の様態やいじめについての考え、さらに自由記述で意見を求めたが、この報告では、紙数の関係で質問1から質問3までの結果を報告していく。

IV. 結果

1. 衝動性

表1は、小学生の衝動性の結果である。衝動性は7項目について3段階評定(0, 1, 2点)で調べているので、得点は0~14点までに分布している。ここでは、4点以下を「衝動性はない」、5点以上~10点を「中程度」、11点以上を「衝動性あり」とみなすことにした。

表1 衝動性

	全体			小4		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
人数	303	153	150	99	47	52
平均	8.59	8.62	8.55	8.70	9.15	8.29
標準偏差	2.57	2.62	2.52	2.42	2.31	2.47
	小5			小6		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
人数	99	49	50	105	57	48
平均	8.42	8.35	8.50	8.64	8.42	8.90
標準偏差	2.57	2.65	2.52	2.71	2.82	2.58

その結果、衝動性は全体として8.59、男子全体で8.62、女子全体で8.55となった。どの学年でも、「衝動性は中程度である」という結果であった。衝動性に関しては、学年や男女に差はみられなかったが、男子も女子も学年があがるにつれて標準偏差が高くなっており、どの学年でも男子の方が女子より高くなっている。これは、学年があがるにつれて、一般的には衝動性をコントロールできるようになる子が多くなるはずであるが、逆にできないままに思春期にはいり、以前よりも衝動性が高くなっている子がいると考えられる。

2. 直接的・間接的な暴力的影響

表2は、直接的な暴力的影響の結果である。直接的な暴力的影響とは、他の人が暴力的行為をしているのを見たり、他人から暴力をふるわれたり、自分から他

の人に悪口を言ったり暴力をふるったりすることである。質問2の(1)「大人の人にたたかれたことがある」、(2)「友だちにたたかれたことがある」、(5)「友だちにいやなことを言ったことがある」、(6)「ともだちをケガさせるほどたたいたことがある」がそれに該当する項目である。これら項目を3段階(1. 一度もなかった, 2. ちょっとあった, 3. 何回もあった)で回答を求め、それぞれ0, 1, 2点と得点づけした。

得点は0~8点までに分布している。ここでは、2点以下を「直接的な暴力的影響が低い」、3~5点を「中程度」、6点以上を「高い」とみなすことにした。

直接的な暴力的影響は、全体として3.64、男子全体で4.20、女子全体で3.07であった。4年生全体3.28、4年生男子3.64、4年生女子2.96、5年生全体3.74、5年生男子4.35、5年生女子3.14、6年生全体3.89、6年生男子4.53、6年生女子3.13となった。

表2 直接的な暴力的影響

	全体			小4		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
人数	303	153	150	99	47	52
平均	3.64	4.20	3.07	3.28	3.64	2.96
標準偏差	1.50	1.49	1.28	1.25	1.21	1.22
	小5			小6		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
人数	99	49	50	105	57	48
平均	3.74	4.35	3.14	3.89	4.53	3.13
標準偏差	1.60	1.64	1.33	1.56	1.47	1.31

どのパターンをみても、直接的な暴力的影響は「中程度」であった。これを学年別にみると、学年があがるにつれて直接的な暴力被害を経験することは低いけれども、少しずつ高くなっている。また、どの学年も、女子のほうが男子よりも低く、男子のほうが高学年になるにつれてやや高くなっている。

表3は、間接的な暴力的影響の影響について調べている。間接的な暴力の影響とは、他人が自分以外の誰かに暴力をふるったりするのを見たりすることであり、また、テレビやマンガなどから与えられる暴力的な情報も、子どもに影響をおよぼしていると思われる。質問2の(3)「友だちが他の友だちをたたいているのを見たことがある」、(4)「大人の人がたたきあっているのを見たことがある」と(7)「暴力をあつかった映画、テレビ、ゲームソフト、漫画、雑誌などをどのくらい見たことがあるか」の3項目である。なお、(7)については、質問項目として映画から雑誌までの5種類を

別々に回答してもらった。いずれも3段階評定で求めたので、得点は0～14点まで分布している。ここでは、4点以下を「間接的な暴力の影響が低い」、5～9点を「中程度」、10点以上を「高い」とした。

表3 間接的な暴力経験の影響

平均値表	全体			小4		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
人数	303	153	150	99	47	52
平均	5.35	6.48	4.21	4.47	5.60	3.46
標準偏差	2.96	3.02	2.41	2.88	3.08	2.28
平均値表	小5			小6		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
人数	99	49	50	105	57	48
平均	5.79	7.02	4.58	5.77	6.74	4.63
標準偏差	3.10	3.22	2.47	2.72	2.66	2.34

その結果は、全体として5.35、男子全体では6.48、女子全体では4.21であった。全体としては、間接的な暴力的经验の影響は「中程度」という結果であるが、性別でみると、男子は女子に比べてやや高く、女子は「低い」ものであった。学年ごとでは、どの学年も女子よりも男子のほうが高く、また、男子では4年生に比べて、5、6年生の男子は高くなっている。女子では、4、5、6年生でそれほど増えておらず、間接的な暴力経験の影響は「低い」という結果であった。また、女子に比べて男子は標準偏差が高くなっている。このことは、男子においては、間接的な暴力的经验の影響の受けやすさに個人差がみられるのかもしれない。

3. いじめられた経験の有無とその対処の仕方

表4は、これまでにいじめられた経験の有無についての結果である。「いじめられたことはない」と答えた児童は、全体では22.8%、男子全体では20.9%、女子全体では24.7%であった。「いじめられたことはあるが、今はない」と答えた児童は、全体では62.4%、男子全体では61.4%、女子全体では63.3%であった。「今の学年になってから、いじめられている」と答えた児童は、全体では14.8%、男子全体では17.7%、女子全体では12.0%であった。学年別にみると、「いじめられたことはあるが、今はない」という男子児童は、4年生で51.1%であったが、しだいに増えていき、6年生では66.7%となっている。女子児童では、4年生が67.3%、5年生で60.0%、6年生で62.5%となっている。

同様の傾向が、「今の学年になってからいじめられている」という項目でもみられる。男子児童は4年生で29.8%から減少していき、5年生で18.4%、6年生では7.0%となっている。同様の傾向が女子児童にもみられ、小学4年生の15.4%から小学5年生では12.0%、6年生で8.3%となった。

表4 いじめられた経験の有無(%)

	性	いじめられた経験の有無(%)			合計
		ない	今はない	今ある	
小4	男	9 (19.1)	24 (51.1)	14 (29.8)	47 (100)
	女	9 (17.3)	35 (67.3)	8 (15.4)	52 (100)
	計	18 (18.2)	59 (59.6)	22 (22.2)	99 (100)
小5	男	8 (16.3)	32 (65.3)	9 (18.4)	49 (100)
	女	14 (28.0)	30 (60.0)	6 (12.0)	50 (100)
	計	22 (22.2)	62 (62.6)	15 (15.2)	99 (100)
小6	男	15 (26.3)	38 (66.7)	4 (7.0)	57 (100)
	女	14 (29.2)	30 (62.5)	4 (8.3)	48 (100)
	計	29 (27.6)	68 (64.8)	8 (7.6)	105 (100)
合計	男	32 (20.9)	94 (61.4)	27 (17.7)	153 (100)
	女	37 (24.7)	95 (63.3)	18 (12.0)	150 (100)
	計	69 (22.8)	189 (62.4)	45 (14.8)	303 (100)

現在・過去を含めて、いじめられた経験は、どの学年をみても約8割ある。今までに行われてきた調査では、いじめられたことはないと答える児童が約5割だったことと比べると、かなり多いことがわかる。

表5は、質問3の(1)で過去あるいは現在いじめられている児童のいじめ被害の様態を示したものである。いじめ被害の様態は、1. 仲間はずれにされた 2. 悪口を言われた 3. たたかれた 4. いやなことを無理にさせられた 5. 持ち物をかくされた 6. 持ち物をよごされた 7. いやなことを言われた 8. その他 である。この質問には、当てはまる番号すべてに○印をつけてもらった。

その結果、「1. 仲間はずれにされた」は、全体では45.7%、男子は44.6%、女子は46.9%であった。この項目では、小学4年生と5年生では男女とも約40%ほどであるが、小学6年生では60%弱となっている。とくに6年生の女子では67.7%であった。

「2. 悪口をいわれた」の結果は、全体では70.9%、男子は70.2%、女子は71.7%であった。この「2. 悪口をいわれた」では、4年生全体では66.7%、5年生全体では74.0%、6年生全体72.4%となっており、4年生と5、6年生との間に差がみられた。

ことばによるいじめでは、「2. 悪口をいわれた」と同様に「7. いやなことを言われた」の結果をみる

小学校におけるいじめ(1)

表5 いじめ被害の様態(%)

	性	1	2	3	4	5	6	7	8	合計
小4	男	16 (42.1)	26 (68.4)	12 (31.6)	10 (26.3)	13 (34.2)	4 (10.5)	23 (60.5)	1 (2.6)	38 (100)
	女	17 (39.5)	28 (65.1)	12 (27.9)	9 (20.9)	9 (20.9)	4 (9.3)	22 (51.2)	12 (27.9)	43 (100)
	計	33 (40.7)	54 (66.7)	24 (29.6)	19 (23.5)	22 (27.2)	8 (9.9)	45 (55.6)	13 (16.0)	81 (100)
小5	男	17 (41.5)	30 (73.2)	20 (48.8)	3 (7.3)	11 (26.8)	5 (12.2)	27 (65.9)	2 (4.9)	41 (100)
	女	13 (36.1)	27 (75.0)	13 (36.1)	5 (13.9)	12 (33.3)	8 (22.2)	18 (50.0)	5 (13.9)	36 (100)
	計	30 (39.0)	57 (74.0)	33 (42.9)	8 (10.4)	23 (29.9)	13 (16.9)	45 (58.4)	7 (9.1)	77 (100)
小6	男	21 (50.0)	29 (69.0)	17 (40.5)	8 (19.0)	13 (31.0)	9 (21.4)	23 (54.8)	3 (7.1)	42 (100)
	女	23 (67.7)	26 (76.5)	8 (23.5)	9 (26.5)	10 (29.4)	7 (20.6)	27 (79.4)	7 (20.6)	34 (100)
	計	44 (57.9)	55 (72.4)	25 (32.9)	17 (22.4)	23 (30.3)	16 (21.1)	50 (65.8)	10 (13.2)	76 (100)
合計	男	54 (44.6)	85 (70.2)	49 (40.5)	21 (17.4)	37 (30.6)	18 (14.9)	73 (60.3)	6 (5.0)	121 (100)
	女	53 (46.9)	81 (71.7)	33 (29.2)	23 (20.4)	31 (27.4)	19 (16.8)	67 (59.3)	24 (21.2)	113 (100)
	計	107 (45.7)	166 (70.9)	82 (35.0)	44 (18.8)	68 (29.1)	37 (15.8)	140 (59.8)	30 (12.8)	234 (100)

と、全体では59.8%、男子は60.3%、女子は59.3%であった。「悪口」の結果ほどではないが、「いやなこと」についても男女とも約60%ほどであり、6年生の女子では、79.4%と高い率を示した。

「3. たたかれた」の結果は、全体では35.0%、男子は40.5%、女子は29.2%で男女差がみられた。男女差を学年ごとにみると、4年生で3.7%、5年生で12.7%、6年生で17.0%となっており、学年があがるにつれて差が大きくなっている。

「4. いやなことを無理にさせられた」の結果は、全体では18.8%、男子は17.4%、女子は20.4%であった。4年生では23.5%、5年生では10.4%、6年生では22.4%であり、5年生では他の学年に比べて少なかった。

「5. 持ち物をかくされた」については、全体では29.1%、男子は30.6%、女子は27.4%であった。どの学年でも30%前後みられた。

「6. 持ち物を汚された」という結果は、全体では15.8%、男子は14.9%、女子は16.8%であり、「5. 持ち物をかくされた」項目の結果と比べて、その比率は半分ほどであった。持ち物を汚すというよりも、隠して困らせてやるというより意地悪な行動が多くなっていった。また、学年が高くなるにしたがって、4年生9.9%、5年生16.9%、6年生21.1%と増えている。

「8. その他」の結果は、全体では12.8%、男子は5.0%、女子は21.2%であった。いじめの様態で「8. その他」に回答した男子は、4年生1人、5年生2人、6年生3人であったが、女子は4年生27.9% (12人)、5年生13.9% (5人)、6年生女子20.6% (7人) で

あった。現在あるいは過去にいじめられた経験のある男子児童において、どんないじめをうけていたかといういじめの様態については、回答を求めた「1. ～7.」まででほとんどすべてをカバーすることができていた、しかし、女子児童では、21.2% (24人) が「1. ～7.」も含めて、それ以外のいじめも受けていたという回答であった。

いじめの様態でもっとも多かったのが、「2. 悪口を言われた」(70.9%)、ついで「7. いやなことを言われた」(59.8%)、第3位が「1. 仲間はずれにされた」(45.7%)という結果であった。身体的な痛みや苦痛をとまなう「3. たたかれた」(35.0%)という結果は、第4位であった。「7. いやなことを言われた」は、「2. 悪口を言われた」と同じような意味として、○印をつけて回答した児童が多いと思われるが、「1. 仲間はずれにされた」ということも精神的な苦痛をとまなう内容である。友だちからいじめを受けたような場合、直接的に「たたかれた」場合に受ける苦痛よりも、「悪口や仲間はずれ」などのような精神的苦痛を強いられるいじめが多いことがわかる。小学生のいじめでは、身体的苦痛よりも精神的苦痛を強いられるいじめが多いという結果であった。

表6は、質問3の(1)で過去あるいは現在いじめられている児童がそのいじめに対して、どのように対処したのかを示したものである。いじめ被害児童の対処の仕方は、1. だまってやられる通りにした、がまんした 2. やめるように言った、さからった 3. 友だちに助けをもとめた 4. にげた 5. 先生に言った 6. 親や家族に言った 7. 冗談でごまかした

表6 いじめ被害児童の対処の仕方 (%)

	性	1	2	3	4	5	6	7	8	合計
小4	男	11 (28.9)	17 (44.7)	7 (18.4)	12 (31.6)	13 (34.2)	14 (36.8)	6 (15.8)	2 (5.3)	38 (100)
	女	10 (23.3)	15 (34.9)	5 (11.6)	1 (2.3)	14 (32.6)	29 (67.4)	4 (9.3)	6 (14.0)	43 (100)
	計	21 (25.9)	32 (39.5)	12 (14.8)	13 (16.0)	27 (33.3)	43 (53.1)	10 (12.3)	8 (9.9)	81 (100)
小5	男	6 (14.6)	26 (63.4)	1 (2.4)	9 (22.0)	17 (41.5)	11 (26.8)	6 (14.6)	3 (7.3)	41 (100)
	女	7 (19.4)	16 (44.4)	8 (22.2)	8 (22.2)	17 (47.2)	22 (61.1)	3 (8.3)	2 (5.6)	36 (100)
	計	13 (16.9)	42 (54.5)	9 (11.7)	17 (22.1)	34 (44.2)	33 (42.9)	9 (11.7)	5 (6.5)	77 (100)
小6	男	18 (42.9)	23 (54.8)	3 (7.1)	4 (9.5)	10 (23.8)	15 (35.7)	7 (16.7)	4 (9.5)	42 (100)
	女	10 (29.4)	10 (29.4)	8 (23.5)	1 (2.9)	7 (20.6)	19 (55.9)	5 (14.7)	2 (5.9)	34 (100)
	計	28 (36.8)	33 (43.4)	11 (14.5)	5 (6.6)	17 (22.4)	34 (44.7)	12 (15.8)	6 (7.9)	76 (100)
合計	男	35 (28.9)	66 (54.5)	11 (9.1)	25 (20.7)	40 (33.1)	40 (33.1)	19 (15.7)	9 (7.4)	121 (100)
	女	27 (23.9)	41 (36.3)	21 (18.6)	10 (8.8)	38 (33.6)	70 (61.9)	12 (10.6)	10 (8.8)	113 (100)
	計	62 (26.5)	107 (45.7)	32 (13.7)	35 (15.0)	78 (33.3)	110 (47.0)	31 (13.2)	19 (8.1)	234 (100)

8. その他 である。この質問には、当てはまる番号すべてに○印をつけてもらった。

まず、「1. だまってやられる通りにした、がまんした」の結果は、全体では26.5%、男子で28.9%、女子で23.9%であった。学年別で見ると、4年生25.9%、5年生16.9%、6年生36.8%であった。4年生から5年生へとやや少なくなっているが、6年生で20%ほど増えている。この傾向は女子にもみられるが、男子のほうが5年生(14.6%)から6年生(42.9%)へと28.3%も増加している。

「2. やめるように言った、さからった」という結果は、全体では45.7%、男子54.5%、女子36.3%であった。いじめられている児童がいじめている児童に対して直接に「やめるように言ったり、さからう」という行動は、男児と女児では18.2%の差がみられた。この傾向はどの学年でもみられた。学年別では、4年生は39.5%、5年生は54.5%、6年生43.4%であり、5年生でもっとも多くなっていた。

いじめを受けた場合、周りにいる友だちや先生、両親などにいじめられていることを打ち明け助けを求めるといふ対処の仕方がある。まず、「3. 友だちに助けを求めた」という結果は、全体では13.7%、男子9.1%、女子18.6%であった。学年別では、4年生14.8%、5年生11.7%、6年生14.5%であった。友だちに助けを求めるといふ対処の仕方は、比較的少ないようである。とくに男児の場合、4年生18.4% (7人)、5年生2.4% (1人)、6年生7.1% (3人)と少なかった。それに比べて女子では、4年生女子11.6% (5人)、5年生女子22.2% (8人)、6年生女子23.5% (8

人)であり、男児よりも友だちに助けを求めるといふ対処をしていた。

いじめを受けたときに「4. にげた」といふ対処法は、全体では15.0%、男子20.7%、女子8.8%であった。この対処の仕方は、女子よりも男子の方が多く、男子では4年生(31.6%)、5年生(22.0%)、6年生(9.5%)とほだいに減少している。女子でも5年生では22.1% (8人)となっているが、4年生は2.3% (1人)、6年生でも2.9% (1人)となっている。

いじめられている事実を先生に相談して解決しようとする「5. 先生に言った」といふ対処法は、全体では33.3%、男子で33.1%、女子で33.6%であった。学年別で見ると、4年生33.3%、5年生44.2%、6年生22.4%であった。4年生から5年生へと10.9%増えているが、5年生から6年生へと21.8%の減少となっている。こうした特徴は男女ともにみられた。

いじめられていることを「6. 親や家族に言った」といふ対処法は、全体では47.0%、男子33.1%、女子61.9%であった。全体として半分ぐらいの児童は、親や家族に打ち明けて助けを求めているが、こうした傾向は女子の方が男子よりも28.8%も高い結果であった。こうした男女の違いはどの学年にもみられた。

「7. 冗談でごまかした」の結果は、全体では13.2%、男子は15.7%、女子は10.6%であった。全体としてこうした対処法が低率(13.2%)であることは、この対処法ではいじめが解消しないからかもしれない。

「8. その他」の解決法をとっている児童は、全体では8.1%、男子7.4%、女子8.8%であった。どの学年も、性別でもこの対処法をとっている児童は少な

小学校におけるいじめ(1)

表7 いじめを受けている児童の気持ち

	性	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
小4	男	11 (28.9)	15 (39.5)	13 (34.2)	6 (15.8)	11 (28.9)	22 (57.9)	14 (36.8)	13 (34.2)	2 (5.3)	38 (100)
	女	8 (18.6)	13 (30.2)	15 (34.9)	5 (11.6)	13 (30.2)	18 (41.9)	22 (51.2)	16 (37.2)	6 (14.0)	43 (100)
	計	19 (23.5)	28 (34.6)	28 (34.6)	11 (13.6)	24 (29.6)	40 (49.4)	36 (44.4)	29 (35.8)	8 (9.9)	81 (100)
小5	男	6 (14.6)	12 (29.3)	13 (31.7)	5 (12.2)	11 (26.8)	24 (58.5)	9 (22.0)	15 (36.6)	0 (0.0)	41 (100)
	女	2 (5.6)	9 (25.0)	13 (36.1)	2 (5.6)	8 (22.2)	20 (55.6)	6 (16.7)	15 (41.7)	4 (11.1)	36 (100)
	計	8 (10.4)	21 (27.3)	26 (33.8)	7 (9.1)	19 (24.7)	44 (57.1)	15 (19.5)	30 (39.0)	4 (5.2)	77 (100)
小6	男	9 (21.4)	13 (31.0)	19 (45.2)	10 (23.8)	8 (19.0)	28 (66.7)	16 (38.1)	9 (21.4)	2 (4.8)	42 (100)
	女	11 (32.4)	11 (32.4)	21 (61.8)	7 (20.6)	10 (29.4)	16 (47.1)	17 (50.0)	19 (55.9)	3 (8.8)	34 (100)
	計	20 (26.3)	24 (31.6)	40 (52.6)	17 (22.4)	18 (23.7)	44 (57.9)	33 (43.4)	28 (36.8)	5 (6.6)	76 (100)
合計	男	26 (21.5)	40 (33.1)	45 (37.2)	21 (17.4)	30 (24.8)	74 (61.2)	39 (32.2)	37 (30.6)	4 (3.3)	121 (100)
	女	21 (18.6)	33 (29.2)	49 (43.4)	14 (12.4)	31 (27.4)	54 (47.8)	45 (39.8)	50 (44.2)	13 (11.5)	113 (100)
	計	47 (20.1)	73 (31.2)	94 (40.2)	35 (15.0)	61 (26.1)	128 (54.7)	84 (35.9)	87 (37.2)	17 (7.3)	234 (100)

った。4年生全体9.9%、4年生男子5.3%、4年生女子14.0%、5年生全体6.5%、5年生男子7.3%、5年生女子5.6%、6年生全体7.9%、6年生男子9.5%、6年生女子5.9%となった。

いじめを受けている児童の対処法としては、全体としてもっとも比率の高かったのは、「2. やめるように言った、さからった」という項目であった。いじめられている児童のうちで、45.7%の児童がいじめっ子に対して、「いじめを止めるように言った」ことがわかる。いじめている児童に対して、「やめて」とは言いにくいものであるが、結果から推測すれば、最近では「いやなことはいやだ」と意思表示のできる子どもが増えているという結果かもしれない。また、「5. 先生に言った(33.3%)」や「6. 親や家族に言った(47.0%)」というような、いわゆる「大人に相談する」という方法もまた、多くみられた。いじめの被害にあった場合、「1. だまってやられる通りにした、がまんした」と回答した児童は、26.5%であるから、裏を返せば、70%以上の児童は、泣き寝入りすることなく、なんらかの対処法をしているといえよう。

表7は、質問3の(1)で過去あるいは現在いじめられている児童の気持ちについて質問紙に回答してもらった結果を示したものである。いじめを受けている被害児童の気持ちについては、1. がまんするより仕方がないと思った 2. だれも助けてくれないのでとてもつらかった 3. 友だちにうらぎられたと思った 4. まわりで見ているクラスの人に腹が立った 5. 先生に助けてほしいと思った 6. 何か仕返しをしたいと思った 7. もう学校へは行きたくないと思っ

た 8. クラス替えをして欲しいと思った 9. その他 である。この質問も当てはまる番号すべてに○印をつけてもらった。

いじめの被害児童の気持ちについて、「1. がまんするより仕方がないと思った」という結果は、全体では20.1%、男子21.5%、女子18.6%であった。学年別にみると、4年生23.5%、5年生10.4%、6年生26.3%であり、4年生と6年生と比べて5年生は低い比率であった。また、4年生男子(28.9%)と6年生女子(32.4%)が高い比率であった。

「2. だれも助けてくれないのでとてもつらかった」という結果は、全体では31.2%、男子33.1%、女子29.2%であった。学年別にみても男女別にみても、いじめを受けている児童の30%ほどが「だれも助けてくれないのでつらかった」という反応であった。

「3. 友だちにうらぎられたと思った」という結果は、全体では40.2%、男子37.2%、女子43.4%であった。学年別では、4年生34.6%(28人)5年生33.8%(26人)、6年生52.6%(40人)となっており、6年生の児童の選択率が高く、とくに6年生女子は61.8%(21人)であった。

「4. まわりで見ているクラスの人に腹が立った」という結果は、全体では15.0%、男子17.4%、女子12.4%であった。学年別では4年生や5年生に比べて、6年生の比率が22.4%で高率であった。

「5. 先生に助けてほしいと思った」という結果は、全体26.1%、男子24.8%、女子27.4%であった。学年別では、4年生29.6%、5年生24.7%、6年生23.7%と少しずつさがっている。この項目では、男子よりも

女子の方がより先生にいじめの抑制力を期待しているようであった。

「6. いくつか仕返しをしたいと思った」という結果は、全体54.7%、男子61.2%、女子47.8%であり、男子の方が女子よりもこの項目の選択率は高かった。学年別では、4年生49.4%、5年生57.1%、6年生57.9%であり、高学年になると仕返しをしたいと思う比率が多かった。とくに男子では、4年生57.9%、5年生58.5%、6年生66.7%と増加傾向がみられた。

いじめを受けたときに「7. もう学校へは行きたくないと思った」という児童の割合は、全体では35.9%、男子32.2%、女子39.8%であった。学年別では、4年生44.4%、5年生19.5%、6年生43.4%となっており、4年生や6年生に比べて4年生の選択率が低いものであった。

いじめが起こり、自分がいじめられる立場になったとき、「8. クラス替えをして欲しいと思った」という児童は、全体では37.2%、男子30.6%、女子44.2%であった。どの学年の選択率も35%前後である。男子では4年生34.2%、5年生36.6%、6年生21.4%であり、4、5年生の選択率に比して6年生の比率が低いのである。女子では、4年生37.2%、5年生41.7%、6年生55.9%となっており、学年が高くなるとクラス替えを希望する女子が多いことがわかる。

「9. その他」の結果は、全体7.3%、男子3.3%、女子11.5%であった。

いじめを経験したことがある児童の気持ちについては、もっとも多かったのが、「6. いくつか仕返しをしたいと思った」という反応が54.7% (128人) 選択され、次いで「3. 友だちにうらぎられたと思った」という反応も40.2%選択されていた。

V. 考察

いじめは、どの社会でも昔から起きていたが、現代では社会現象化するほどに問題となっている。職場や家庭においても例外ではないが、近年、とくに学校におけるいじめや悲劇的ないじめ自殺が社会的な問題となっている。最近では、小学生にも携帯電話が必需品のように普及し、いじめの新しい定義にも示されているように、パソコンや携帯電話による中傷や悪口なども深刻な問題となっている。

小学校では、まだ幼児期を脱していないような1年生から、すでに思春期を迎え心身ともに成長した6年生までの児童が勉学している。そうした多数の子ども

たちが学校生活の中でなんらかの問題が生じ、それが適切に解決されないような場合、それがストレスとなり弱いものへの攻撃という形でいじめが発生してくる。乳幼児期の家庭教育や小学校教育の中で、こうしたストレスを適切な手段で発散させコントロールしていくことができれば、いじめは未然に防止されていくであろう。

表1と表2をみると、小学生の衝動性や直接的な暴力的影響も中程度という結果であった。また、表3の間接的な暴力経験の影響も全体としては中程度であり、暴力的な経験の直接的・間接的な影響は、男子のほうが女子よりも学年が高くなると比率が高くなっているが、暴力的経験の受けやすさには個人差がみられるようである。

どの学年でも約8割の児童は、いじめられた経験があるという結果は、従来の調査(坂本昇一, 1996)による約65%よりも多くなっている。

いじめ被害の様態については、以前の調査結果と同様に、「悪口」、「いやなことをいわれた」、「仲間はずれ」など精神的な苦痛をとまなういじめが多く、次いで「たたたく」や「暴力をふるう」、さらに「ことばでの脅し」など直接的な行動となっている。いずれも以前の調査結果(文部省初等中等教育局, 1991)よりも高い比率となっている。

いじめられたときの対処法としては、被害者が親や先生にいじめられていることを訴えたり、また直接に加害者に対して「いじめを止めるように」と意思表示をしている比率が高く、被害者が黙ってがまんしたり、やらねばなし、ということはより少なかった。こうした点では、親や教師がいじめの初期の段階で適切な対処をすることがいじめ防止の鍵になることであろう。

いじめを受けたときの気持ちについて、被害経験のある児童が多肢選択形式で選んだ項目のなかで、もっとも多く選択されていたのは、「6. いくつか仕返しをしたいと思った(54.7%)」である。この項目は加害者に対する積極的な反撃を秘めた気持ちである。また、次に多いのは「3. 友だちにうらぎられたと思った(40.2%)」であった。この項目は加害者に対する消極的な対峙姿勢であり、友だちや同級生(いじめの観衆や傍観者)に対する信頼をなくするきっかけとなっている。こうした気持ちは、状況が変わればいじめの被害者が加害者としていじめに加担したりするきっかけとなったり、また新たな被害者を生む契機にもなりかねないであろう。対処法の中で「先生に(いじめられ

ていることを)言った(33.3%)」に対して、「先生に助けて欲しいと思った」という項目の選択率が全体で26.1%みられることは、ある程度、先生の対処の仕方がうまくいかなかったことを示している。

2005年度の都道府県別いじめの発生件数によれば、小学校におけるいじめ件数が全国で5,087件あり、愛知県は857件でもっとも多かったし、中学校や高等学校におけるいじめ件数でも同様の結果であった。1,000人あたりのいじめ発生件数は、3.4であり、全国平均1.6の2倍以上である。こうした事実をふまえて、学校にはいじめがあることを前提として対処していくことが要請されている。

現代のいじめは、陰湿になり、大人のいないところで巧妙になされることが特徴的であり、いじめそのものが教師や親の目には映りにくくなっている。また、思春期や青年期の児童や生徒は自我に目覚め、自尊心も高く、反抗期でもあるため、あえて親や家族にいじめを打ち明けないことも多く、発見が遅れる時期でもある。

しかしながら、調査結果では、約3割の児童が先生に、約5割の子どもが親にいじめられていることを相談しており、いじめられている児童の約半数がいじめている子に「いじめをやめるように言ったり、反抗の姿勢」を示している。つまり、いじめられている児童も親や先生に訴え、自分でもいじめている子に対峙し

ようとしている。今、必要なことは、子どもたちが安心して大人に頼れるような環境をつくり、いじめられている子どもの言い分を十分に聞いてやり、その心に寄り添いその辛さをわかってやることである。そうすることによって、発達の上にある子どもたちは、最終的にはいじめから立ち直り、いじめられた経験を糧にして、大きく成長していくであろう。

参考文献

- 中日新聞社・社会部編 1994 清輝君がのこしてくれたもの 海越出版社
- 文部省初等中等教育局 1991 生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について 大蔵省印刷局 494-495.
- 文科省初等中等教育局中学校課 1993 生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について 大蔵省印刷局
- 酒井亮爾 1996 学校におけるいじめ —1995年の場合— 愛知学院大学人間文化研究所紀要「人間文化」11, 11-42.
- 酒井亮爾 2000 いじめ自殺(平成10年間の場合) 愛知学院大学文学部紀要 135-155.
- 酒井亮爾 2007 「いじめ」と文科省の対策 愛知学院大学論叢 心身科学部紀要 2(増刊号) 51-60.
- 坂本昇一編 1996 教育にとって「いじめ」とは何か 明治図書 117-119.

最終版平成20年9月27日受理

Bullying in the Elementary Schools (1)

Ryoji SAKAI

Abstract

An incident of “bullycide” happened in 2006 and bullying in schools has again become a sensational issue. In this paper we submitted a questionnaire regarding the issue of bullying to 303 school children (from 4th graders to 6th graders) in three elementary schools. Items in the questionnaire consisted of impulse, experiences of bullying, state of bullying, coping with bullying, feelings of being bullied, ways of thinking about bullying and so on. They were rated in three or five point scales.

The result showed that impulse and direct influence in violence was moderate. Furthermore, as the school grade became higher, schoolboys were in the higher rate more other than schoolgirls in the influence of violent experiences. Sensibilities of violent experiences, however, showed individual variation.

About 80% of children had experiences of being bullied in school and many states of bullying were abuse, being spoken ill of and being left out by classmate. These are examples of bullying accompanied with mental pain. There were beating, violence and threats in the examples of direct behavior.

As to the coping behavior in the bullying experience, the child who was bullied often told parents or teachers facts about the bully, or the victim often told them not to continue with the bullying. Recently there are few who endure the bullying without a word or continued to be beaten by the bully.

It will be the key to an anti-bullying strategy that parents and teachers cope appropriately with bullying at the earliest possible period.

Keywords: bullying, bullycide, school child, elementary school